

2013.3.21

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

Newsletter



チームミーティング見聞録

～言語チームミーティング・総合チームミーティングより～

全学共通カリキュラム運営センターでは、言語教育科目、総合教育科目を展開しており、カリキュラム構想や運営を担う組織として「構想・運営チーム」という実働部隊が、言語、総合それぞれで活動をしています。なかでも、チームミーティングという集まりは、カリキュラムについて熱い議論が飛び交う、そういう性格を持ち合わせた全カリ教育の根幹を担う活動体になります。

今回、おもてに出ることの少ない、言語チームミーティング、総合チームミーティングについて、各担当事務局スタッフが感じるままの視点で、その熱い様子をレポートします。

ひかり

本学職員／教務部全学共通カリキュラム事務局 田中 恵美

Lumière…フランス語で「光」を意味する言葉であるが、同時に「啓蒙」を意味する。17世紀末頃～18世紀フランスのいわゆる「啓蒙の世紀」に生まれた表現だという。大げさかもしれないが、多言語との出会いは目を啓かれるという意味で「啓蒙」と言えるかもしれない。グローバル化が叫ばれて久しいが、ここ数年の「緊迫感」はこれまでより強い。本学でも世間でも、「グローバル化＝英語力」であり、それは現実的には否定できない部分もある（かくゆう私も冷や汗をかきながら英語の習得に励んでいるところである）が、全カリでは発足以来の二言語主義が守られている。事務局の仕事を通していても、多言語は多文化だと実感することがよくある。

「言語チームミーティング」は、全カリ内で最も現場に近い、意思決定機関である。その正規メンバーは各言語科目を担当する異文化コミュニケーション学部の教員のみによって構成される。その雰囲気はといえば、和やかで、和気あいあい…と言いたいところだが、いつもそうとは言い難い。同じ時間、同じ日本語で、同じ課題を共有しても、言語によって、履修者の性質によって、必要なことは少しずつ違ったりするし、現場の苦勞が分かるからこそ、折り合いがつかなかったりもする。



言語チームミーティングでメンバーから学生や教室の様子を聞、その真剣な協



議を目の当たりにするまで、教員が学生にこんなに真剣に向き合っているとは知らなかった。学生が意外と狭い世界で生活していることも知らなかった。例えば、スペイン語履修者から「スペイン語を履修して、南米にスペイン語話者が多く存在することをはじめて知った」とかドイツ語履修者から「ドイツの文学作品を読んだことはなかったが、授業を通じて興味がわいたので、読んでみたいし、講義も受講してみたい」という声を聞いたこともある。ただ、大きな理想や科目担当者からの要望は、それ自体は、至極もつともであっても、限られた資源では実現できないことがたくさんある。言語全体として統一した回答が必要なこともある。それは事務局としても、一番頭のいたいところである。言語チームミー

目次

チームミーティング見聞録	田中恵美／飯塚琴乃 (1)
言語教育科目（英語）事例紹介	伏野久美子 (3)
言語副専攻（英語）アドバンスト・コース修了者報告	富山和也／石井志緒理 (4)
総合教育科目（領域別B）事例紹介	有馬賢治／居村啓子 (5)
2012年度全カリ運営センターの主な活動	(7)
総合自由科目の紹介	青木康 (8)

ティングで話し合われることは、それをどうやって調整するかということである。

言語間の隔たりはとても大きいと思うことがある。学生の意識と教員の意識、それから私たち事務局の意識も違うところに向いているのではないかと思うこともある。しかし、一方で、言語、文化、立場の違うものの共存が学生に幾筋かの光を与えることがある。私自身もそれを感じている。言語チームミーティングは、いつもあまり「光」の入らない13号館の会議室*で開催しているが、私たちが話し合っているのはそういうことではないかと思う。

*)前ページの写真の撮影日のみ、12号館の会議室で開催した。

〈言語教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏名	所属	担当言語
リーダー	新野 守広	異文化コミュニケーション学部	
メンバー	森 聡美		英語教育研究室主任
	浜崎 桂子		ドイツ語教育研究室主任
	小倉 和子		フランス語教育研究室主任
	佐藤 邦彦		スペイン語教育研究室主任
	細井 尚子		中国語教育研究室主任
石坂 浩一	諸言語教育研究室主任		

※ 2012年度

ある日の、総合チームミーティング

本学職員／教務部全学共通カリキュラム事務室 飯塚 琴乃

リーダー：「2012年度からはじまった『領域別B』の科目担当者アンケートの結果を踏まえ、今後、より科目が充実するように、改善点を考えていきたい。メンバーの先生方、ご意見をいただけますか。」

メンバーA：「いわゆる『古典』を読んだクラスでは、学生の出席状況が好ましくありません。古典や英語の文献ばかりだと、学生たちには難しすぎるのでしょうか。」

メンバーB：「いや、そもそも『領域別B』の科目の定義が、授業運営を難しくしているのではないですか。『読む』ということを中心にするならば…」

これは、とある日の、総合チームミーティングの様子である。総合チームミーティングは、チームリーダーである中島先生、メンバーの下地先生、溜箭先生、西山先生、山高先生、安松先生の合計6名で組織され、これに陪席の全カリ部長である青木先生、副部長である菅沼先生、そして事務局（全カリ事務局／教務事務センター）が加わり2週間に1回のペースで開催されている。総合チームミーティングでは、開講中の科目の運営や、次年度のカリキュラム策定に関して協議しているが、特に今年度は、全科目抽選登録化や新カリキュラムの運用が始まったことに伴う検証など、今後の改善策に関する議題が多い。先述的一幕は、新カリキュラム施行後1年が経過し、実際の授業運営はどのようなものであったかを話題にしている際のものだ。チームメンバーは、原則として2年の任期となっている。そのため、過年度から継続のメンバーは、カリキュラムが作られる過程に基づいた多角的な意見を出し、一方で、今年度着任したメンバーは、カリキュラム策定に関わっていなかつ



たからこそ、率直な意見を出してくる。

チームリーダーやメンバーは、所属の学部が異なる。それゆえ、それぞれが学部所属の教員としての意見も持っている。ある議題について、ミーティングで話し合う際も、「全カリでは、今までこうやってきた。しかし、〇〇学部ではこういった対応をとっている」というように、全カリとしての立場と、各々の学部としての立場を踏まえた考えが示される。所属の教員がおらず全学で支えることが求められる全カリ。1人の教員から、それぞれ異なる立場での考えを聞くことができる点も、総合チームミーティングの特徴ではないだろうか。



リーダー：「今後の『領域別B』については、さらに検証を進めなくてはならないことが分かりました。それでは、本日のミーティングはこれで終了です。次回は2週間後に開催します。みなさん、遅刻せずにお集まりください！」

〈総合教育科目構想・運営チーム〉

役職名	氏名	所属	担当分野
リーダー	中島 俊克	経済学部	
メンバー	下地 秀樹	学校・社会教育講座	人文学系担当
	溜箭 将之	法学部	社会科学系担当
	西山 志保	社会学部	社会科学系担当
	安松 幹展	コミュニティ福祉学部	スポーツ・人間科学系担当
	山高 博	理学部	自然・情報科学系担当

※ 2012年度

【言語教育科目（英語）事例紹介】

英語副専攻 Academic Studies (advanced presentation) を担当して

本学ランゲージセンター教育講師 伏野 久美子

2012年度後期に英語副専攻 Academic Studies の中の1科目である「Advanced Presentation」を新座キャンパスで担当しました。このコースはTOEICなどで高得点を取得している学生を対象に、将来英語圏の大学・大学院に留学する際に必要なスキルの獲得を目指し、高レベルな英語力を高めていくことを目的とするクラスです。2年生以上の学生が対象ですが、このクラスを受講したのは、全員2年生の女子学生で、学部は観光、コミ福、各2名の合計4名でした。

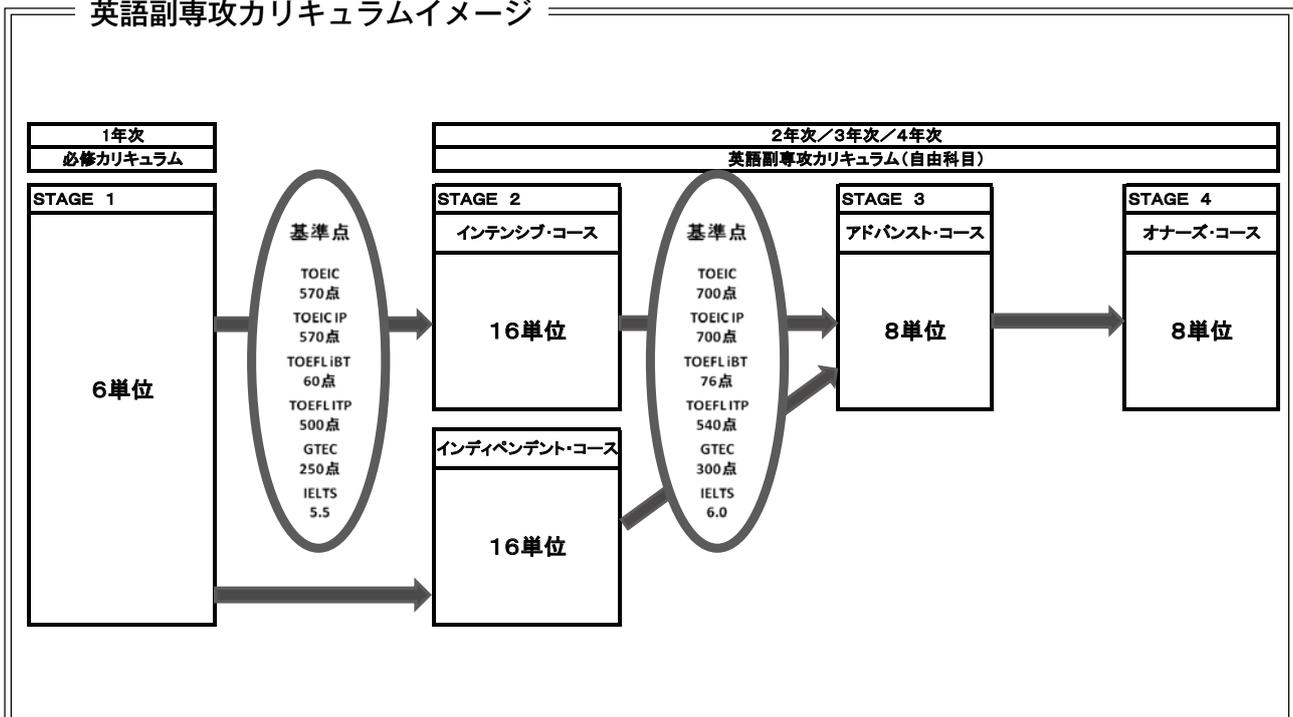
授業を担当するにあたり、まず考えたのが、留学先のどのような場面で英語のプレゼンテーションをすることがあるかということでした。私の大学院での経験をもとに、インタビュー実施報告とブックリポートのミニプレゼンテーションを行い、中間課題としてアカデミックトピックについての文献検索に基づく10分間のプレゼンテーション、ファイナル課題としてミニリサーチ（サーベイ）のレポートを12分間のプレゼンで行いました。中間プレゼンとファイナルプレゼンではパワーポイントも作成してもらいました。プレゼンのあとは必ず自己評価・ピア評価・教師評価を行い、プレゼンを客観的に見ることで、改善を図りました。また、Steve Jobsのプレゼンの映像を見たり、私が学会発表で使用したパワポのスライドを見せたりもしました。

教科書は「The Essential Guide for Academic Presentations」(Tanaka, 2012)を使用しました。この教科書はプレゼンのスキルを網羅しており、1年生のプレゼンテーションの授業よりもより詳しく、高度なプレゼンのスキルが学べるようにできています。まず、私が教科書に基づきパワポとハンドアウトを作成し、それを使用して授業を行いました。それを手本として、その次の章からは学生と私が持ち回りで、パワポやハンドアウトも作成し、教科書の内容を教え合う授業を行い、私が担当でない時には、学生のサポートに回りました。

2年生とは言え、将来大学院へ留学をしたいという希望を持った学生たちでしたので、学習意欲が高く、本当によく準備をして授業に参加してくれました。また、実際に自分が「教える」という経験をすることで、話し手の立場と聞き手の立場を実感することができ、どのようにしたら自分の言いたいことを効果的に伝えられるかという、プレゼンでとても大切なことを学んでもらえたと思います。

残念だったのは、受講者が4名という小規模クラスだったためグループプレゼンができなかったことと、大勢の前で発表をする時の緊張感をどうコントロールするかということの体験学習ができなかったことです。その代わりに、大柴杯スピーチコンテストに代表者を送ることにし、1人の学生が参加してくれ、クラスメートが応援にかけつけ、その結果、優勝を勝ち取ることができました。クラス全員で優勝の喜びを分かち合えたことは大きな収穫でした。少人数ならではの和やかさと一体感のあるクラスであり、また、学生主体で学びを高めあうことができた、学生主体の密度の濃い授業だったと思います。

英語副専攻カリキュラムイメージ



【言語副専攻（英語）アドバンスト・コース修了者報告】

立教大学の英語授業を振り返る

本学観光学部3年次 富山 和也

立教大学を志望した理由のひとつに、英語教育に力を入れているというものがありました。入学すると、必修カリキュラムとして英語のクラスがたくさんあり、とても楽しみにしていたことを覚えています。自分と同じくらいの英語スキルを持った学生とクラス編成をしていることもあり、お互いに刺激し合えるライバルのような関係で、英語能力を高め合うことができたと感じています。1年次の必修カリキュラムを終え、2年次になろうとしていた頃、全カリ英語副専攻カリキュラムがあることを知りました。英語に触れる機会を多くつくりたいと思っていた私は、多くの英語の科目を履修しようと決めていました。そんな中、スキップ制度を利用してアドバンスト・コースの科目を履修できることになったのです。

2年の前期に「Lecture and Discussion」を履修し、この授業は週に2回のゼミのような授業で、ジェンダー、言語、知識、社会問題などに関するさまざまな内容の文献を英語で読み、ディスカッションも行いました。先生が講義するだけでなく、学生が数人の班に分かれて、他の学生に英語で講義をする機会もあり、担当のマコナキー先生は、英語のレベルのみを上達させるのではなく、英語を使用して論理的に考える力を高める授業作りをしてくれました。英語で話すだけでなく、論理的に、しかも英語で物事を考えなければならなかったので、本当に頭を使い授業のたびにとても疲れました。(笑) この授業を受けて思ったことは、英語が話せるだけでは意味がないということです。物事を論理的に考える力があり、さらに英語でそれを伝えられる能力が、本当に価値のあることだと学びました。

2年のうちにアドバント・コースを修了してしまおうと、池袋・新座の両キャンパスで英語の科目を履修し、努力した甲斐もあってか、無事にアドバンスト・コースを修了することができました。アドバンスト・コースとしての必要単位を修得したことで、全学共通カリキュラム運営センターから修了証書を授与され、頑張ってきてよかった、という達成感も得ることができました。

3年次になるとアドバンスト・コースの上級クラスである、オナーズ・コースが選択できるようになりました。マコナキー先生の「University Lecture」を選択したのですが、履修者が少なく、先生と一対一で授業を受けることになりました。少人数授業の良いところは、先生が一人ひとりに注げる力が大きいということです。学生も英語を使用する機会が増え、先生に意見を言いやすく、相互の意思疎通が図れることです。先生とも親しくなり、授業外で会った時にも英語で話すことができました。

今後も英語の学習を続け、次のステップである、オナーズ・コースを修了したいと考えています。英語を駆使し、世界中を飛び回って活躍できる人間になりたいと思っています。

アドバンスト・コースを修了して

本学異文化コミュニケーション学部3年次 石井 志緒理

「留学なしで自分の英語力を伸ばしたい。」その思いから、私はアドバンスト・コースの履修に挑戦することにしました。私が所属する異文化コミュニケーション学部では学生全員が2年次後期に半年間の海外留学を行います。学部生の8割が留学先に英語圏を選ぼうと、私は留学先にドイツを選びました。英語圏に留学する他の学生たちとの英語運用能力の差を最小にしたいと思っていた私にとって、英語圏の大学レベルの英語学習を行えるアドバンスト・コースはとても魅力的なものでした。

留学前の2年次(2011年度)前期と留学後の3年次(2012年度)前期の2期で「Lecture and Discussion」、 「Advanced Academic Vocabulary」、 「TOEIC 3」などの科目を履修しました。「Lecture and Discussion」では、実際の海外の大学教員の講義映像を見て自分の意見を英語でアウトプットしたり、学生同士で討論を行ったりするなどの活動に加え、英字新聞を読み、そこで取り上げられている時事問題について個人でプレゼンテーションを行うなどの活動を行い、学生が能動的に英語を使用するという実践的な科目になっていました。課題もボリュームがあり大変な部分も多かったですが、海外の大学のレベルを感じることができたと思っています。「Advanced Academic Vocabulary」では、学術論文を読み取る力とアカデミックな語彙や文章の書き方などを学ぶことができました。毎週小テストでの復習もあったため、新しい語彙や表現を短期間で覚えることができました。そして「TOEIC 3」では、ビジネス英語の表現を学んだり、TOEICテストのスコアアップのための問題演習などを行ったりと、文法面を強化する講義を受けました。それぞれの科目を通してリスニング・スピーキング・リーディング・ライティングの4能力をバランス良く向上させることができたと感じています。またどの講義にも真剣に取り組んだ結果、現在では英語圏に留学した他の学生にも劣らない英語運用能力を身につけることができました。日本にしながら自分のベース・自分の好きな科目で英語のスキルアップを図れたので、負担を感じることなくコースの受講を進めることができたと感じています。

カリキュラムを通して身に付けた英語力は、自分の専門科目でも活かすことができます。3年次後期には、専門演習という学部の講義で英語論文を執筆しなければならなかったのですが、「Academic Vocabulary」で習得した語彙や表現を活用することで無事に書き上げることができました。

言語を学ぶことで、その言語の運用能力を伸ばすことができるだけでなく、言語が変わることによる新しい物の見方や考え方を発見できるという楽しさを味わうことができます。このように「自分の視野を広げる」という面でも、アドバンスト・コースに挑戦する意義はあったのだと思います。今後も身に付けた英語力を活かしながら学生生活・研究活動に取り組んでいきたいと思っています。

【総合教育科目（領域別B）事例紹介】

領域別B「経営学文献レビュー」を担当して

本学経営学部教授 有馬 賢治

2012年度後期に「経営学文献レビュー（松下幸之助に学ぶ経営観）」を担当させていただいた。全カリとしても新たな試みということを知っていたが、担当者としても他学部の学生に専門分野の文献を講読させることによる反応を模索する中で授業を開始した。

本科目は、経営学領域の基礎的な文献の精読を通して経営とは何か、商売とは何かといった働くことの基本的な意味を考えさせ、論理的思考能力の涵養を目標に授業を展開した。テキストには「経営の神様」と称される松下幸之助氏の理念が平易な言葉で記述され、松下氏の基本的な理念のエッセンスが凝縮されていると評判の高かった『商売心得帳』（PHP文庫）を使用した。毎回、販売の観点と社員育成の観点から書かれた2つのエピソードを指定し、学生には事前に該当箇所を熟読の上で要約を記したレポートの提出を義務付けた。そして、レポートの提出によって出席点を与え、授業中での発言などにより平常点を加点していくという方式で授業への積極的な参加を促した。

授業は、学生に文献の1～2段落を音読させ、その部分の要旨を説明させたうえで教員から質問を投げかけていく形を基本とし、該当箇所の背景にある経営学やビジネスの基礎的な知識の解説を補足するといった形式を繰り返していった。学生は、平常点が加点されることもあり、積極的に挙手をしてくれたので教員が一方的に話せばかりいる講義形式の授業とは異なった展開をすることができた。また、学生には国語辞典や電子辞書、あるいはスマートフォンを利用して文中の概念を調べさせ、文脈の中での意味を深く考えさせることができるように促しながら精読を進めていった。

学生が、文献に記されている内容を読解すること自体は平易なようであったが、経営学の基礎的な知識がないために、企業や経営者が意図している内容を十分に理解することには苦戦したようであった。領域別科目は、カリキュラムの設計上経営学部以外の学生が履修対象者なので、ビジネスの基礎知識や経営学の体系的な理解を他の科目に頼ることはできないわけである。したがって、経営学部の必修科目で伝えるべき内容や、自身の専門領域であるマーケティングの基礎的部分を板書で補いながら学生の理解を深めるよう心掛けて授業を進めていった。

授業は静肅性が保たれ、学生の積極的な発言を引き出すこともできていたと思われる。授業後に質問に来る学生や、なかにはオフィスアワーに就職活動に関する相談で研究室を訪れる学生もいたので、授業内容から発展させて興味・関心を拡げることができた学生も少なからずいたのではないかと感じた。

経営学部の学生に教えている場合とは異なる観点から質問や意見が出されることも多く、教える側にも新たな気づきや刺激を与えてくれる授業であった。

科目名（タイトル）	経営学文献レビュー〈松下幸之助に学ぶ経営観〉
担当者（フリガナ）	有馬 賢治（アリマケンジ）
学期／単位数	後期／2単位
備考	経営学部所属学生履修不可 定員：40名

■授業の目標

経営学の基礎的な文献の精読を通して論理的思考能力と自らの意見を発言する力を身につける。

■授業の内容

「経営の神様」と称される松下幸之助氏の理念を平易な言葉で記述した文献を毎回1、2エピソードずつ精読する。そして、経営とは何か、商売とは何かといった働くことの基本的な意味を考える。ここでは特にマーケティングに関わる内容を中心に考える。

■授業計画

次のようなエピソードを随時精読していく。

- ・お客様とは何か。
- ・利益の考え方。
- ・成功する販売方法。
- ・不景気の時の商売。
- ・競争の在り方。
- ・人を見る眼。
- ・人を育てる。
- ・経営者の心得。

■成績評価方法・基準

毎回指定箇所をまとめたレジュメの提出を出席点とし（60点）、授業中の発言による平常点（40点）を加点し総合的に評価する。

■テキスト

松下幸之助著『商売心得帳』（PHP文庫 本体476円（税別））

■参考文献

講義中に適宜紹介する。

■準備学習・その他（HP等）

国語辞典、電子辞書などを携帯することが望ましい。

※2012年度シラバス

*領域別科目群

他学部の提供科目を全カリ科目として履修できるよう、各学部が提供する科目群で、「領域別A（講義系）」と「領域別B（文献系）」の2系統を柱とします。学生は所属学部の提供科目を履修することはできません。領域別Aには、他学部の学生が各学部の学問的特性に触れることのできる科目群、言い換えれば、学生にとって異質な専門性への導入となる科目群が配置されます。

また、今回事例紹介として取り上げた領域別B*には、各学部の学問分野で重要ないし基礎的とみなされている文献や書物をさまざまな形で読み込み、その読書体験を元に、自らの思考力や表現力を高める講義系科目を配置しています。

*) 定員：40人

「言語研究・言語教育研究レビュー(フレーズロジーと英語教育)」を担当して

本学異文化コミュニケーション学部助教 居村 啓子

総合教育科目領域別Bの「言語研究・言語教育研究レビュー」(文献系)は、学生が自分の専門外の資料を読みながら、異質な世界や思考法を学ぶという設定で2012年度より導入されました。この授業は「英語のフレーズ」に徹底的に焦点をあて、語彙の観点、言語習得の観点、コーパスの観点、そして教育の観点からセレクトした文献を読み、身近な例と照らし合わせながら主体的に考えるという授業でした。英語が好きだけれど、自分の英語は何処か不自然さがつきまとうという印象をいただいていた学生にとって、その不自然さはどこからくるのか、どうしたら流暢さが身につくのか、本来言語はどのようにして身に付くのか、という点を考える機会になったと思います。比較的新しい概念であったため、学生には新鮮に映った様子でした。Wray (2000)*はformulaic sequences (FS) という概念を提唱しつつも、その存在の根拠、科学的実態は解明されていないと言及しています。授業ではまず、フレーズの定義に関わる文献を読みこなすことが必須となりました。無数にある定義に触れた上で、言葉の共起性という概念があること、またFSの多くは流暢性、自動性につながり、コミュニケーションを円滑にする機能を持つこと、また母語習得に於いて、こどもは言葉を分析的ではなく総合的にとらえ、だんだんと分解していくこと等、オムニバスではありましたが、英語の表現とは何かという根幹に触れた瞬間だったのではないかと思います。

前半でフレーズの根本概念、そして言葉の習得の本質について触れた上で、後半はより実践的な内容を扱い、学生自身が主体的に考える機会をより多く設けました。大人の第二言語習得の文献を扱う週では、実際のデータをもとに、留学前と留学後の大学生のフレーズの使用に変化がもたらされたか否かを母語話者のデータと比較しながら、質的に分析しました。さらにフレーズロジーと関連が深いコーパス言語学の分野の文献に触れながら、実際のインターフェイスを使いコンコーダンスラインから例文を検索する方法等を扱いました。学生は現存する英語のデータベースの存在に熱心に着目していたように思います。この授業ではフレーズの全体像を扱い、これまであまり着目されていなかった「言語の固まり」という概念に触れると共に、言語観のシフトにつながり得る文献を多く読み、考え、ディスカッションを重ねました。最終レポートの課題、「フレーズ」の概念をどのように英語教育に活かすかを通して、学生ならではの斬新な発想から、実現可能な実践的なアイデアが続出したことが成果の一つであると感じています。また今後英語教育に携わる学生も、専門外の学生も、「言葉が固まりとして機能する」ということを引き続き考えていって欲しいと思います。

科目名 (タイトル)	言語研究・言語教育研究レビュー 〈フレーズロジーと英語教育〉
担当者 (フリガナ)	居村 啓子 (イムラ ケイコ)
学期/単位数	後期/2単位
備考	異文化コミュニケーション学部所属学生 履修不可 定員: 40名

■授業の目標

この授業では英語の表現とは何かという根本概念を学びつつ、語彙獲得のメカニズムと英語教育への応用について主体的に考える。

■授業の内容

フレーズロジーは語彙習得の一分野として近年注目を集めている。ことばは単独で存在するものではなく、常に他のことばと共に起している。英語の表現の成り立ちの根本、また母語、および第二言語獲得との関連性についての基礎概念を学ぶと同時に、英語教育への応用について考える機会を設ける。

■授業計画

- ・英語表現とはなにか
- ・フレーズの定義 1
- ・フレーズの定義 2
- ・フレーズと母語の獲得
- ・フレーズと第二言語習得 1
- ・フレーズと第二言語習得 2
- ・フレーズと認知
- ・フレーズとコーパス 1
- ・フレーズとコーパス 2
- ・フレーズとコロケーション1
- ・フレーズとコロケーション2
- ・英語教育への応用 1
- ・英語教育への応用 2
- ・まとめ

■成績評価方法・基準

- 出席点30%
- リアクションペーパー30%
- 最終レポート40%

■テキスト

なし(文献のプリントを配布する)

■参考文献

授業内で紹介

■準備学習・その他(HP等)

各回の予習範囲や課題は毎回事前に提示する。

※2012年度シラバス

*) Wray, A. (2002). Formulaic language and the lexicon. Cambridge: Cambridge University Press.

2012年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

〈言語教育科目構想・運営チーム〉

- ①英語教育研究室
- ・4月4日(水) 新任オリエンテーション
(池)マキムホール M201教室 11:00～12:00
 - ・4月4日(水) 前期FDセミナー
(池)マキムホール M201教室 13:30～16:00
 - ・7月7日(土)～20日(金)
前期 言語副専攻(英語)アンケート 実施
回収枚数:1,909枚
 - ・12月15日(土)第13回大柴杯スピーチコンテスト
(池)5号館5121教室
 - ・12月8日(土)後期FDセミナー
(池)5号館 5121教室 13:30～15:30
 - ・1月7日(月)～23日(水)
後期 英語カリキュラムアンケート(英語必修科目)
実施 実施数:3,500枚
 - ・英語ウェブテスト(GTEC)実施
1年次対象:4月期(プレイメントテスト)、1年次英語eラーニング履修者対象:9月期(前期末)、1月期(後期末)、英語ライティング履修者、2～4年次対象:7月21日(土)～9月10日(月)、1月24日(木)～2月21日(木)
- ②ドイツ語教育研究室
- ・7月26日(木)前期担当者連絡会
(池)11号館A101教室 16:30～18:00
 - ・2月19日(火)後期担当者連絡会
(池)11号館A101教室 16:30～18:00
- ③フランス語教育研究室
- ・7月3日(火)前期担当者連絡会
(池)12号館第3・4会議室 17:00～18:30
 - ・12月22日(土)後期担当者連絡会
(池)池袋図書館 講習会室2 15:30～17:45
- ④スペイン語教育研究室
- ・7月24日(火)前期担当者連絡会
(池)マキムホール 会議室(6階) 18:30～21:00
 - ・1月31日(木)後期担当者連絡会
(池)マキムホール 第2会議室 18:30～21:00
- ⑤中国語教育研究室
- ・6月23日(土) 前期担当者連絡会
(池)マキムホール第1・2会議室 15:00～16:30
 - ・1月12日(土)後期担当者連絡会
(池)マキムホール第1・2会議室 15:00～17:30

⑥諸言語教育研究室

- ・7月27日(金)前期担当者連絡会(朝鮮語)
(池)12号館 会議室(2階) 17:00～19:00
- ・1月28日(月)後期担当者連絡会(朝鮮語)
(池)ロイドホール 第2階会議室 18:00～20:00

〈総合教育科目構想・運営チーム〉

- ・7月20日(金)2012年度第2回担当者連絡会
(池)11号館 A203教室 17:00～18:30
- ・2月22日(金)2013年度第1回担当者連絡会
(池)池袋図書館 講習会室1・2 17:00～19:00

〈新任教員対象オリエンテーション〉

- ・3月30日(金)
ランゲージ・センター主催オリエンテーション(新任教育講師対象)
青木康(全カリ部長)、新野守広(言語チームリーダー)、出席
- ・4月5日(木)・10日(火)
人事課主催オリエンテーション
「全カリについて」の説明:青木康

〈授業評価アンケート関連〉

- ①言語教育科目構想・運営チーム
- 【2012年度「授業評価アンケート」関連】
- ・全カリ言語教育科目「授業評価アンケート」実施(2012年度後期科目対象)
1月7日(月)～23日(水) 実施科目数:251科目
 - 【「授業評価アンケート報告書」関連】
 - ・全カリ言語教育科目「授業評価アンケート2011年度報告書」作成(2012年12月刊行)
- ②総合教育科目構想・運営チーム
- 【2011年度「学生による授業評価アンケート」関連】
- ・2011年度「学生による授業評価アンケート」学部等総評の作成
 - 【2012年度「学生による授業評価アンケート」関連】
 - ・2012年度「学生による授業評価アンケート」実施
実施科目数:前期144科目、後期141科目、計285科目

※次ページ後段に続く。

【総合自由科目の紹介】

学生の皆さんへ

総合自由科目の開始

2013年4月から全カリ総合教育科目に自由科目が登場します。2012年度まで全カリは大別して、総合の選択科目と、言語の必修科目・自由科目とからなっていました。そこに今回、総合の自由科目が新たに加わるのです。

全カリはこれまでも質量ともに豊かな総合教育科目を選択科目として展開してきました。それは、学生の皆さんが様々な分野・領域の科目を履修し、そこで得た知識を統合して幅広い視野を獲得するのを期待してのことでした。そのような全カリの総合教育の基本姿勢は今後も変わりませんが、そのために、学部の専門カリキュラムのように、関連性の強い複数の科目の履修を体系的に積み重ねて、学びを深めていくというプロセスをとることが、全カリ総合では難しくかっただけで済むでしょう。幅広さの一方で、体系的や積重ねを考えると、全カリの総合教育にとって長年の課題であったのです。そこで、卒業までに全カリの総合教育科目で20単位を修得しなければならないというルールは、選択科目の範囲内でそのまま残し、新たに総合自由科目を導入して、そこで体系的な科目履修をとまうプログラムを提供するという工夫がなされました1)。

2013年度から新しく始まる総合自由科目には、2つのプログラムが用意されています。「グローバル・リーダーシップ・プログラム」と「『国際協力人材』育成プログラム」という2つのプログラムは、いずれも、立教大学がその社会的な使命や課題を強く意識して、学部を越えて全学的に推進していこうとしている教育のための取り組みです。具体的な内容の紹介は別の機会に譲りますが、いずれのプログラムでも、それぞれが掲げる目標達成のために、レベルや段階を明確に意識した複数の科目が用意され、履修者は順を追ってそれぞれのプログラムの科目を学んでいくことになります。2013年度は初年度ですので、プログラムの上位科目でまだ開講されない科目もあり、それらは2014年度以降順次開講されます。新しい取り組みですので、履修に関して特に注意が必要な点があります2)。履修要項等をよく読んで、多くの方が積極的に履修されることを期待しています。

- 1) 総合自由科目の単位は全カリ総合の卒業要件単位20単位には算入されませんが、言語自由科目、全カリ総合の選択科目の超過履修分とともに、各学部の規定の範囲内で卒業要件単位として認められます。
- 2) 例えば、「『国際協力人材』育成プログラム」には、明治大学、国際大学のキャンパスで開講される科目も含まれています。なお、総合自由科目は2012年度以降の入学ししか履修できません。

(青木康：全学共通カリキュラム運営センター部長)

〈シンポジウム〉

テーマ：「全カリにおけるアクティブ・ラーニングと学生の能動的学修」

日時：2012年11月13日(火)18:30～20:30

池袋キャンパス 太刀川記念館多目的ホール

プログラム：

◆基調講演

溝上慎一氏(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

◆事例報告

高山一郎氏(英語ディスカッション教育センター副センター長／本学異文化コミュニケーション学部教授)
小澤康裕氏(本学経済学部准教授)

◆司会

中島俊克氏(総合チームリーダー／本学経済学部教授)
*本シンポジウム筆録は『大学教育研究フォーラム』第18号(2013年3月発行予定)に掲載

〈学会・シンポジウム参加〉

・5月26日(土)・27日(日)

大学教育学会第34回大会「転換期の大学教育」参加
下地秀樹(総合チームメンバー)、里村由紀・飯塚琴乃(全カリ事務室)

*学会参加についての報告は、本誌No.32(2012年9月発行)に掲載



全カリニュースレター No.33

印刷 2013.3.18 発行 2013.3.21

発行人 青木 康

編集人 佐竹 晶子、中島 俊克

発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター

印刷 株式会社 白峰社